

読書記録シート

読書番号 13 氏名 有田 志子

記入年月日 2003 年 6 月 21 日

題目（書名・論文名）おもしろ言語のラボラトリー

著者 編者；森 敏昭

出版社 北大路書房

出版年 2001/09/1 ページ数 p

書籍のありか 未来大図書館

関連する箇所の内容

4章 文章理解（谷口篤）p75-95 5章 筆記的思考 6章 文章の要約

文章理解の重要な背景として、1978年に、キンチェがグローバルな言語理解モデルを提唱した。それは、マクロ構造（ボトムアップ処理）と状況モデル（トップダウン処理）の2つからなる。マクロ構造とは、文章の要素（文字、文）に重きを置いて、文章の内容を正確に表現するモデルである。よってボトムアップ処理と呼ばれる。一方、状況モデルとは私たちが自分の既有知識を使って文章の内容を推論することによってテキストを理解することである。人間は、この2つの処理を組み合わせて文章を理解している。

文章からの知識の獲得を支援する方法として、1 先行オーガナイザ 2 アナロジー 3 具体化情報の提示の 3つの方法がある。先行オーガナイザは、一般的、抽象的な包括的概念に関するものが文章理解を促すというもの。アナロジーは、必要な既有知識を活性化するとき用いられる。具体化情報の提示とは、具体的で熟知した内容を提示することである。また、谷口は「情報の利用可能性」という条件を満たしたときに、文章理解は成功すると述べている。1 ターゲット文章が理解に必要であり、2 既有知識が使えるようなものであり、3 読者がその新しい情報を既有知識との整合性を吟味する。

以上の3点を満たすとき、既有知識と新しい情報の有意味な統合が生じる。

自分の意見

まだ、残されている問題として、批判的に読む能力（情報の取捨選択の能力）、協同的学習場面でのリーディングがあるそうだ。授業で音読をさせるというのは、効果的なのだろうか？ 自分の心の音読と他者による音読にちがいはあるのだろうか？

批判的に読む能力、共感して読む能力どちらも必要だと思う。